



第7号
1989. 12. 5
定価200円

編集 「風をよむ」編集委員会
発行 共産主義者同盟首都圏委員会



例えは全労協はその基調を「豊かな社会」の対局に置かれていて「新しい貧困と差別」を重視し、労働者の精神的、肉体的苦痛、経済的、政治的抑圧から解放をめざす要求を土台として「闘う」としている。こうしたアプローチは間違っていないにしても、現実の労働者多数が「豊かな社会」へとつながる形で包摂されている根拠、そして「豊かな社会」そのものが生み出す社会的疎外と矛盾を見落とすことになりかねない。窮乏化論と「受動的に革命を待たない労働者」とでもいえる古典的な階級観では、時代を切り開くことは不

可能だろう。例えば全労協は女性労働者との団結の強化を八項目の運動基調のひとつとしてあげている。だがその内容は、労働条件の充実をかけるのみである。確かにそれは極めて重要な課題である。しかし同時に「男性専制社会」そのものを変えていくという視点に立ち、ライフスタイルの変革そのものまで射程に入れた政策がたてられねば、総評となら変わらな

ない。労働運動が社会的にも一度意義を持ちうるためには最低これくらいのことは必要である。「労働の基盤は、なによりも労働者の生活と職場の要求を基礎とする抵抗闘争の前進にあります」と全労協は述べる。確かにこのことは重要だ。しかし組合運動を少しでも指導したことがあれば、職場での階層的な支配、年令、性別などによる差別構造の中で、要求は多様であり、どのように集約していくかが大きな課題であるかは明白だろう。そこで問われるのは、

何を指すのかという、組合運動の理念である。この点について全労協はあまりにも貧弱であるといえよう。総評的政治の根底的批判を、こうした基調に危機感をもったのか、今年の十月集会是「社会的労働運動の形成」を「戦略的課題」にすえた。だがその内容は労働条件をめぐる闘い、さまざまな社会運動、政治運動を羅列したにすぎない、極めてお粗末なものである。従来企業主義的、効率主義的、男権主義的価値観を根本的に問いなおそうとする運動の内容から学び、合流し、闘うことが要求されている」と基調は述べてい

る。問題は、何を学ぶのかであり、それがなくては単なる空語であろう。あるいは「連合」があたかも「労働組合の政治的役割の喪失」をもたらしたと批判し、「政治的役割を再生させる闘い」をしかけていくが、いまでもなく連合は「労働組合の政治的役割を喪失させた」のではない。より政治的役割を強めたのである。問題は連合的政治に収斂された、総評的政治そのものの問い直しである。また十月集会是、社会的労働運動の形成とともに、戦略的課題として「中小労働運動の強化」をしかけていく。しかし「中小労働運動」ということ自体がよくわからないうちに、これが社会的労働運動の形成と並列されるというように戦略概念が混乱している。特に問題となるのは、「中小労働運動」

「連合」の発足と新しい労働運動

地域と結びつき、生活を包み込んで…

十一月二日、「連合」が正式に発足し、戦後、労働運動・社会運動の極をなした総評はその四〇年の歴史の幕を閉じた。他方、共産党系、統一労働組合を中心に「闘うナショナルセンター」を唱えて「全労連」（全国労働組合総連合）も同時に発足した。また連合「統一労働組合」という不毛な選択に対し、第三の勢力として「全労協」（全国労働組合連絡協議会）が十二月九日に結成されようとしている。こうして総評・同盟・中立労連・新産別の労働四団体の時代が終焉し、組織労働者の六〇〇余りを有する連合に對し、「左」から全労連・全労協が対峙するという状況に入った。

今日の労働運動をめぐる事態は、発足は、こうした組合の存立根拠となる左右の対立、右派による制圧という図式からは説明しがたい。総評の解散は、総評が右派の同盟に制圧されて強要されたものではな

いし、またかつての産業報国会のように既成の労働組織の解体と上からの組織化というものでもない。それは「労働」という一つのカテゴリーで社会的多数を括ることを可能にし、かつその社会集団を一定の社会体制におけるヘゲモニー集団たらしめ、それを強力な政治的利益組織（労働セクター）として実体化せしめていた諸条件（大量生産システム、ケインズ政策、大きな政府など）が、ことごとくこれら集団や組織を分解させる方向への修正を余儀なくされている（「世紀末の労働運動」篠田徹）総評の解散―新「連合」の

定（並びに場合によってはその執行）において実質的に決定的な役割を果たす仕組みをいう（山口定）現代政治学叢書3 政治体制日本の場合、石油ショックでの、産業労働組合の発足とそこでの所得政策の合意を始まりとして、産業政策全般にわたる官僚と労働組合との「協調体制」の進行として、ネオ・コーポラティズム化の欠如としてしか総括しえず、そ

の充実をかけるのみである。確かにそれは極めて重要な課題である。しかし同時に「男性専制社会」そのものを変えていくという視点に立ち、ライフスタイルの変革そのものまで射程に入れた政策がたてられねば、総評となら変わらな

労働運動のオルタナティブの途を形成していくために

これに對抗して登場した、全労協など「左派」は、総じて労働運動の地盤低下を、戦間性、大衆性

の充実をかけるのみである。確かにそれは極めて重要な課題である。しかし同時に「男性専制社会」そのものを変えていくという視点に立ち、ライフスタイルの変革そのものまで射程に入れた政策がたてられねば、総評となら変わらな

の充実をかけるのみである。確かにそれは極めて重要な課題である。しかし同時に「男性専制社会」そのものを変えていくという視点に立ち、ライフスタイルの変革そのものまで射程に入れた政策がたてられねば、総評となら変わらな

国労闘争とその支援勢力形成を

今までの全労協の根本的な問題点について述べてきた。しかし全

く積極的な意義がないわけでもない。それは国労闘争である。全労協自体、当初は結成がややぶれま

っており、国労が九月の定期大会で参加を決定したことにより発足にこぎつけたといえる。つまり国労

とその支援共闘会議というものが組織の実態である。われわれは十月

会議のように、その実像からかけはなれてあれこれの無意味な意味付

与をするより、まず国労闘争支援の地域的、全国的闘争体として規

定し、そこから反転攻勢の足場をつくっていくべきだと考える。

臨時体制下の国家による偽装倒産と組合潰し、そして不当労働行為に闘う地方労働委員会命令

をJRが踏みしめるという戦後の労働法体系を根本からくつがえし

ている事態は、労働組合運動の存立そのものを問う極めて重大な意味をもっている。その意味で、国

労をめぐる闘いを地域共闘から再構築し、全国的な政治闘争として

組織していきうるか否かに、全労協の存立はもとより、労働組合の

今後自体も大きく左右されるといって過言ではないだろう。全労

協が何等かの積極的意義をもつとすれば、この点以外にないだろう。

特に連合、全労連のせめぎあいの厳しい自治労などでは、国労闘争の大義のもとに、全労協派として

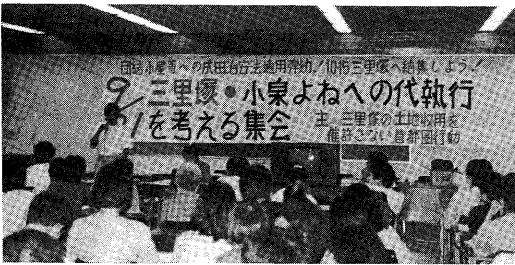
三里塚 12・16東京集会へ

午後6時・於日本橋公会堂

事業認定は失効している！

今年十二月一日、三里塚空港の事業認定が告示されてから、満二〇年となる。

現在、空港二期用地内には十三戸の農家が生活し、21・4ヘク



9.21東京集会



10.15現地闘争

労働組合火災！

権力の介入はねのけ、再建と防衛！！

十月三日午後、労働組合の新社、本館、旧館の三棟が火災（原因がわからず「不審火」）で消失した。合宿所には、精米のため持ち込まれていた収穫したばかりの新米二七〇俵と丸木さんの絵画など金額に替え難い品々が多数残った。この日は北原派反対同盟の現地集會が行われており、一一

タールの土地を所有し耕作をして

いづれ、これを唯一のテコに、反対農民と支援との分断を図り、強制収用をちらつかせながら、反対農民との直接の話し合い（運輸相）という懐柔攻撃を目論んでいるのである。このような政府・空港公団の強引なやりかたの背景には、第五次空港整備計画の最終年にあたる一九九〇年に、二期工事の「概成」を何としてもデッチ上げ、「六空整」で予算化、「二期の完成」という悪あがきにも似たあせりとメンツがある。さらに、来年六月礼宮の結婚、秋にアキヒトの即位の礼、大嘗祭が予定されており、警察権力は過激派狩りを来春までにおきたいという狙いがあり、その「拠点」である三里塚を封じ込め、併せて支援との分断を持ち込み、反対同盟の切り崩しを狙っている。

力が強引に奪い取る法律が「土地収用法」である。

土地収用期限はとくに過ぎているのである。収用法106条によれば「事業認定の告示から一〇年を経過しても、収用した土地の全部を事業の用に供しなかつたときは旧地権者に土地を買い戻す権利（買戻権）が発生する」と規定。すでに事業認定自体も失効しているのである。運輸省は、「二期工事は、二〇年が問題となる」という前言をひるがえし、収用地のごく一部でも工事をすれば、永久に収用できるとの見解を示した。もちろん、その根拠は明らかにしていない。ゴリ押しの一語に尽きるものである。

成田治安法攻撃を粉砕しよう！

さらに運輸省は、九月十九日、成田治安法（成田新法）を適用し、支援の団結小屋など九ヶ所に「使用禁止命令」の通告をしてきたのである。さらに小屋の「封鎖」や「除去」の適用による強制収用を狙っている。

政府・公団は、成田治安法をも

ちださざるをえないところまで追

「第3次代執行」を許すな！

一八年前、大木よねは「だまし討ち」という形で、宅地と田を強制収用された。今また、政府・公団はこの暴挙を画策している。

12・16東京集会に結集しよう！

十月十五日三里塚現地において、事業認定失効・強制収用粉砕の現地集會が行われた。九月十九日の現地団結小屋などへの「成田治安法」の適用、戦旗・共産党と反対同盟の支援共闘関係破壊後の初めての全国集會だったが、全国から千余人が集結した。反対同盟は、

労働組合火災！

この火災は、政府・運輸省による成田治安法使用禁止命令に対し、取り消し訴訟を十三日に提起したばかりの出来事であった。そして火災の直後、わたしらは空港公団による火事場泥棒というべき卑劣な土地強奪行為と闘わなければならなかった。合宿所の敷地は共有地であり、すでに公団は大部分の権利をだましとっていた。公団はそれを理由に管理権を主張し、二四日には敷地から居住者を締め出して土地を奪うために合宿所に攻め入ってきた。反対同盟と支援は二四日の現場検証後、整地作業・資材の搬入を開始し、昼夜分かたずの突貫工事二四日の午前五時には一棟（約二坪）の建物を立ち上げ、公団・権力の暴力的な封鎖攻撃に身を挺して合宿所を守り抜きました。

入管法改悪を許すな！

いま、各地で外国人労働者の悲惨な労働条件や強制退去等が問題視されている中で、政府・法務省は「出入国管理及び難民認定法（入管法）」の改悪を目論み、今国会で成立させようとしている。この動きに対し、指紋捺捺制度・外国人労働者を支援している仲間の

入管法改悪を許すな！

共同で、入管法改悪を許すな！11緊急集會が二九〇人の参加で、熱気あふれる中、開かれた。

入管法改悪を許すな！

まず最初に、「女性の家・H E LP」の松田瑞穂さんから基調報告があり、入管法改悪の問題点を指摘した。

入管法改悪を許すな！

とりわけ、雇用主罰則制度・不法就労助長罪および就労資格証明書の発行、在日韓国人朝鮮人、カラバオの会、女性からの報告があった。各々の分野での政府の不当で強圧的なやり方に対し、怒りをこめての訴えであった。特に、アジア女性の九割は性産業関連で働いている。そして、賃金不払いや売春強制等をさせられている実態は、男性の問題でもあり、女性差別として捉えなければならぬことを強く感じた。また、カラバオの会からは寄せ場労働者として外国人労働者との競合という現実の中で、具体的に彼らとの共闘をつくりだしていきたいという力強い発言があった。

入管法改悪を許すな！

最後に、各地からのアピールをうけ、集會宣言を採択して、デモに移った。

入管法改悪を許すな！

デモは、労働福祉会館から法務省までのコースで長かった（約一時間半）が、参加者全員が大声を張り上げ、元気いっぱいデモであった。

入管法改悪を許すな！

（十一月十七日、自社公民賛成多数で衆院通過／今国会で「成立」の危機が迫っているが、我々は「外国人労働者に合法的な在留資格と単一の労働ビザを認めること。また在日に無条件の永住を求めること。」を求め、新たな差別構造をつくりださうという一切のあらわれと闘い、国際連帯の具体的取り組みを更に強めなければならない。十一・二七）

衆議院通過弾劾

入管法改悪を許すな！

11・11緊急集會報告

共同で、入管法改悪を許すな！11緊急集會が二九〇人の参加で、熱気あふれる中、開かれた。まず最初に、「女性の家・H E LP」の松田瑞穂さんから基調報告があり、入管法改悪の問題点を指摘した。

労働組合火災！

去る十月二日、日曜、午後三時、三里塚現地の横断にある労働組合新社から出火。またたく間に西側の本館、旧館と燃え移り合わせて一七〇坪が焼失するに至りました。消防署と警察の実況検分では出火原因はわからず、合宿所の独自の調査でも原因の分らない「不審火」でした。怪我人がでなかつたことは幸いでしたが火の回りが早く、また、急を聞き駆け付けた反対同盟・支援を警備の兵庫県警機動隊が入り口で足止めしたため、備品の持ち出しが殆どできず、旧館一階の精米所に保管されていた二七〇俵の米も焼失、または冠水してしまいました。

労働組合火災！

周知のように、合宿所は七七年に建設されて以来、居住管理してきた三里塚闘争に連帯する会の活動機能は言うまでもなく、反対同盟の数々の会合や行事に使われ、また、わくわくツアや今夏のピクニック、子供共相国など三里塚を訪れる多くの人々の宿泊施設として利用されてきました。焼失した物資の中には寝具一六〇組をはじめ、多数の食器、衣類、井戸のポンプや、世界・日本の各地で闘う人々から送られた貴重な品々なども含まれていました。

労働組合火災！

今度の火災は、政府・運輸省による成田治安法使用禁止命令に対し、取り消し訴訟を十三日に提起したばかりの出来事であった。そして火災の直後、わたしらは空港公団による火事場泥棒というべき卑劣な土地強奪行為と闘わなければならなかった。合宿所の敷地は共有地であり、すでに公団は大部分の権利をだましとっていた。公団はそれを理由に管理権を主張し、二四日には敷地から居住者を締め出して土地を奪うために合宿所に攻め入ってきた。反対同盟と支援は二四日の現場検証後、整地作業・資材の搬入を開始し、昼夜分かたずの突貫工事二四日の午前五時には一棟（約二坪）の建物を立ち上げ、公団・権力の暴力的な封鎖攻撃に身を挺して合宿所を守り抜きました。

労働組合火災！

この火災は、政府・運輸省による成田治安法使用禁止命令に対し、取り消し訴訟を十三日に提起したばかりの出来事であった。そして火災の直後、わたしらは空港公団による火事場泥棒というべき卑劣な土地強奪行為と闘わなければならなかった。合宿所の敷地は共有地であり、すでに公団は大部分の権利をだましとっていた。公団はそれを理由に管理権を主張し、二四日には敷地から居住者を締め出して土地を奪うために合宿所に攻め入ってきた。反対同盟と支援は二四日の現場検証後、整地作業・資材の搬入を開始し、昼夜分かたずの突貫工事二四日の午前五時には一棟（約二坪）の建物を立ち上げ、公団・権力の暴力的な封鎖攻撃に身を挺して合宿所を守り抜きました。

労働組合火災！

この火災は、政府・運輸省による成田治安法使用禁止命令に対し、取り消し訴訟を十三日に提起したばかりの出来事であった。そして火災の直後、わたしらは空港公団による火事場泥棒というべき卑劣な土地強奪行為と闘わなければならなかった。合宿所の敷地は共有地であり、すでに公団は大部分の権利をだましとっていた。公団はそれを理由に管理権を主張し、二四日には敷地から居住者を締め出して土地を奪うために合宿所に攻め入ってきた。反対同盟と支援は二四日の現場検証後、整地作業・資材の搬入を開始し、昼夜分かたずの突貫工事二四日の午前五時には一棟（約二坪）の建物を立ち上げ、公団・権力の暴力的な封鎖攻撃に身を挺して合宿所を守り抜きました。

労働組合火災！

この火災は、政府・運輸省による成田治安法使用禁止命令に対し、取り消し訴訟を十三日に提起したばかりの出来事であった。そして火災の直後、わたしらは空港公団による火事場泥棒というべき卑劣な土地強奪行為と闘わなければならなかった。合宿所の敷地は共有地であり、すでに公団は大部分の権利をだましとっていた。公団はそれを理由に管理権を主張し、二四日には敷地から居住者を締め出して土地を奪うために合宿所に攻め入ってきた。反対同盟と支援は二四日の現場検証後、整地作業・資材の搬入を開始し、昼夜分かたずの突貫工事二四日の午前五時には一棟（約二坪）の建物を立ち上げ、公団・権力の暴力的な封鎖攻撃に身を挺して合宿所を守り抜きました。

労働組合火災！

この火災は、政府・運輸省による成田治安法使用禁止命令に対し、取り消し訴訟を十三日に提起したばかりの出来事であった。そして火災の直後、わたしらは空港公団による火事場泥棒というべき卑劣な土地強奪行為と闘わなければならなかった。合宿所の敷地は共有地であり、すでに公団は大部分の権利をだましとっていた。公団はそれを理由に管理権を主張し、二四日には敷地から居住者を締め出して土地を奪うために合宿所に攻め入ってきた。反対同盟と支援は二四日の現場検証後、整地作業・資材の搬入を開始し、昼夜分かたずの突貫工事二四日の午前五時には一棟（約二坪）の建物を立ち上げ、公団・権力の暴力的な封鎖攻撃に身を挺して合宿所を守り抜きました。

労働組合火災！

この火災は、政府・運輸省による成田治安法使用禁止命令に対し、取り消し訴訟を十三日に提起したばかりの出来事であった。そして火災の直後、わたしらは空港公団による火事場泥棒というべき卑劣な土地強奪行為と闘わなければならなかった。合宿所の敷地は共有地であり、すでに公団は大部分の権利をだましとっていた。公団はそれを理由に管理権を主張し、二四日には敷地から居住者を締め出して土地を奪うために合宿所に攻め入ってきた。反対同盟と支援は二四日の現場検証後、整地作業・資材の搬入を開始し、昼夜分かたずの突貫工事二四日の午前五時には一棟（約二坪）の建物を立ち上げ、公団・権力の暴力的な封鎖攻撃に身を挺して合宿所を守り抜きました。

労働組合火災！

この火災は、政府・運輸省による成田治安法使用禁止命令に対し、取り消し訴訟を十三日に提起したばかりの出来事であった。そして火災の直後、わたしらは空港公団による火事場泥棒というべき卑劣な土地強奪行為と闘わなければならなかった。合宿所の敷地は共有地であり、すでに公団は大部分の権利をだましとっていた。公団はそれを理由に管理権を主張し、二四日には敷地から居住者を締め出して土地を奪うために合宿所に攻め入ってきた。反対同盟と支援は二四日の現場検証後、整地作業・資材の搬入を開始し、昼夜分かたずの突貫工事二四日の午前五時には一棟（約二坪）の建物を立ち上げ、公団・権力の暴力的な封鎖攻撃に身を挺して合宿所を守り抜きました。

労働組合火災！

この火災は、政府・運輸省による成田治安法使用禁止命令に対し、取り消し訴訟を十三日に提起したばかりの出来事であった。そして火災の直後、わたしらは空港公団による火事場泥棒というべき卑劣な土地強奪行為と闘わなければならなかった。合宿所の敷地は共有地であり、すでに公団は大部分の権利をだましとっていた。公団はそれを理由に管理権を主張し、二四日には敷地から居住者を締め出して土地を奪うために合宿所に攻め入ってきた。反対同盟と支援は二四日の現場検証後、整地作業・資材の搬入を開始し、昼夜分かたずの突貫工事二四日の午前五時には一棟（約二坪）の建物を立ち上げ、公団・権力の暴力的な封鎖攻撃に身を挺して合宿所を守り抜きました。

労働組合火災！

この火災は、政府・運輸省による成田治安法使用禁止命令に対し、取り消し訴訟を十三日に提起したばかりの出来事であった。そして火災の直後、わたしらは空港公団による火事場泥棒というべき卑劣な土地強奪行為と闘わなければならなかった。合宿所の敷地は共有地であり、すでに公団は大部分の権利をだましとっていた。公団はそれを理由に管理権を主張し、二四日には敷地から居住者を締め出して土地を奪うために合宿所に攻め入ってきた。反対同盟と支援は二四日の現場検証後、整地作業・資材の搬入を開始し、昼夜分かたずの突貫工事二四日の午前五時には一棟（約二坪）の建物を立ち上げ、公団・権力の暴力的な封鎖攻撃に身を挺して合宿所を守り抜きました。

労働組合火災！

この火災は、政府・運輸省による成田治安法使用禁止命令に対し、取り消し訴訟を十三日に提起したばかりの出来事であった。そして火災の直後、わたしらは空港公団による火事場泥棒というべき卑劣な土地強奪行為と闘わなければならなかった。合宿所の敷地は共有地であり、すでに公団は大部分の権利をだましとっていた。公団はそれを理由に管理権を主張し、二四日には敷地から居住者を締め出して土地を奪うために合宿所に攻め入ってきた。反対同盟と支援は二四日の現場検証後、整地作業・資材の搬入を開始し、昼夜分かたずの突貫工事二四日の午前五時には一棟（約二坪）の建物を立ち上げ、公団・権力の暴力的な封鎖攻撃に身を挺して合宿所を守り抜きました。

分裂―再編すすむ自治労運動

―大阪・東京・横浜では、いま―

組合運動の空洞化する

自治労の「新連合加盟」を決めた八月の富山大会以降、全国で分裂の嵐が吹きあつてゐる。統一労働組合連合は、日共の強い指導のもとに、既定の路線である「独自の産別づくり―全労連合流」に向けて一気走りだしている。しかしそれらの単組といえども一枚岩にまとまるはずはなく、自治労中央の露骨な組織介入を許し、その結果分裂の事態が進行している。

例えば大阪府職労では、富山大会直後の八月三〇日に二つの大会が同時開催され、統一労働組合系と自治労府職に分裂する事態となった。そこに当局が介入してチェックオフを一時的に解除したため、二つの組合と当局が三つ巴で組合員争奪戦を演じ、最終的に一万五千人が府職労、自治労府職労、非組合員に三分解となり、なお非組合員が増加する傾向にあるという。日頃から党派的引き回しに終始して、深刻化する「組合運動の空洞化」に手をこまねいていたことのつけが回ってきたというものであり、どここの単組でも起こりうる事態とみてよいだろう。

一日の臨時大会で決めたい横浜市従の日共にとっては、大きな衝撃ではあろう。しかし、部分的な戦略の練直しはあつたとしても、来る春の新たな産別組織確立に向けて突っ走るといふ路線に変更はあり得ない。

自治体左派の闘いの方向

この間の労働問題による自治体労働運動の（分裂―再編）劇は、既成労働運動の根底的なつくり直しと社会的労働運動としての再生を目指す我々に格好の舞台を提供している。「自治労結集」「連合擁護」の社会党との無原則な妥協はありえないし、また「統一と団結」派の無内容な主張に溶解する組合主義者に陥つてもならないことはいうまでもない。そして、連合と全労連に引き裂かれ、やむを得ず連合や全労連へ行かざるを得ない多くの自治体左派にとって、「連合内改革派」とかの言辭をもてあそぶことは百害あつて一利なしである。

この間の労働問題による自治体労働運動の（分裂―再編）劇は、既成労働運動の根底的なつくり直しと社会的労働運動としての再生を目指す我々に格好の舞台を提供している。「自治労結集」「連合擁護」の社会党との無原則な妥協はありえないし、また「統一と団結」派の無内容な主張に溶解する組合主義者に陥つてもならないことはいうまでもない。そして、連合と全労連に引き裂かれ、やむを得ず連合や全労連へ行かざるを得ない多くの自治体左派にとって、「連合内改革派」とかの言辭をもてあそぶことは百害あつて一利なしである。

国労闘争に三七〇〇

11・22明治公園

一〇月十六日、北海道と九州からスタートした国労闘争勝利全国キャラバンは、「新連合」発足の翌日、東京総行動が開かれた。二二日、支援の労働者が埋め尽くす東京・明治公園に、登場した。三万七千もの熱気に包まれ、反失業・国鉄清算事業団闘争勝利、JRに労働委員会命令を求める中央総決起集会は、その勝利の第一歩踏み出した。

11.23

即位式・大嘗祭反対の 大衆的闘いを創りだそう

十一月三日、「即位式・大嘗祭」に反対する第一波行動が闘われた。正午より、清水谷公園での実行委員会による闘争に引き続いて、夕方六時半からは、日本教会会館で日本キリスト教協議会（NCC）主催による集会が開かれた。即位の礼検討委員会から「準備委員会」が設置され即位式・大嘗祭の準備が開始された。そして、「喪」明け早々の来年一月には、首相海部を委員長とする「即位の礼委員会」が発足する。

十一月三日、「即位式・大嘗祭」に反対する第一波行動が闘われた。正午より、清水谷公園での実行委員会による闘争に引き続いて、夕方六時半からは、日本教会会館で日本キリスト教協議会（NCC）主催による集会が開かれた。即位の礼検討委員会から「準備委員会」が設置され即位式・大嘗祭の準備が開始された。そして、「喪」明け早々の来年一月には、首相海部を委員長とする「即位の礼委員会」が発足する。

現在、政教分離をめぐって大嘗祭の国家行事化に反対することで、「即位の礼」なるものを「容認」する傾向が生じている。しかし、即位式と大嘗祭とともに、国家神道の儀式として存在していることは多くの識者の指摘を待たずともなくあきらかであり、すでに既定の事実として、即位式と大嘗祭の準備が進行している事実自体、批判して行かねばならない事柄である。アキヒトの「護憲発言」が（象徴）天皇制を民衆に強要していることをはっきりと弾劾し、なし崩し的にかけられてきている国家神道の全面化に反対していかねばならない。



（四画から続く）

三、再びプロレタリアート指定の問題へ

階級指定論の理論的展開

プロレタリア階級概念を先験的所与としてではなく、あるいはまた「階級意識」のイデオロギー的注入でもなく、階級闘争の諸実践をつうじたプロレタリアートの階級形成をめざすというのは、旧旗派（いわゆる情勢派も含めた）の共通の問題意識であった。だが、なにかしら素材加工的に（階級）なるものが造出されるのでもなければ、無から有を生じるように神秘的な現実体験から突然感得されてしまふものでもない。この間の理論的な「階級」指定についての研究は、「資本論」でいうところの「諸収入および収入諸源泉の同一性」にもとづく区分にとどまらず、そうした経済的階級の規定とともに、政治的階級、文化的階級のそれぞれを検討すべきことをあげている。とりわけこの文化的階級について今村仁司は次のように強調している。

「階級文化」というものを考えなければ、階級闘争も考えられないだろう……資金をめぐる経済的階級闘争はいつでもあります……しかし二〇世紀が証明したように、資金が結構もたらえるようになると……階級協調路線までが出てきてしまふ……。しかし、階級文化があり文化的な階級分断線が存在する限り、階級闘争というものはいつまでも続いていく……またそういうことによつて政治的な意味での真の階級闘争が闘われてきた……（「現代思想」89年5月号）

この点については、柴田三千雄もまた、前掲書（P25）において、

示すところでは、ソヴェト・コンミューン原理、プロレタリア国際主義等である。これはまた、階級形成の政治的文化的指標でもある。そして、近代資本主義世界のフレイムとしての国民国家と（支配―従属）システムは、新しい社会原理としての共産主義を実現するに到るための、階級闘争の場にならず、過渡期世界論は、こうした世界史的構造変動の場の連続性と変容とをトレースするのである。

ところで、ここで突然、階級指定や、階級形成の問題を持ち出したのは理由がある。

革命論は、変革対象世界とともに、それと相互規定的に、革命主体をも明らかにするものでなければならぬ。資本主義世界体制のトータル否定、超克を実現する変革主体と、主体形成、すなわちプロレタリアートの世界史的形

今日、多国籍企業資本の顕著な伸長と、世界制覇は、その一方で国民国家の現実的基礎としての国民経済の空洞化、形骸化を急速に促している。これは国民国家そのものの存続をも、およびやすものとならざるをえない。また（支配―従属）システムの深化・再構造化は、各エスニシティ集団の国際的流動化と、自立化、文化的複合

「階級文化」というものを考えなければ、階級闘争も考えられないだろう……資金をめぐる経済的階級闘争はいつでもあります……しかし二〇世紀が証明したように、資金が結構もたらえるようになると……階級協調路線までが出てきてしまふ……。しかし、階級文化があり文化的な階級分断線が存在する限り、階級闘争というものはいつまでも続いていく……またそういうことによつて政治的な意味での真の階級闘争が闘われてきた……（「現代思想」89年5月号）

この点については、柴田三千雄もまた、前掲書（P25）において、

示すところでは、ソヴェト・コンミューン原理、プロレタリア国際主義等である。これはまた、階級形成の政治的文化的指標でもある。そして、近代資本主義世界のフレイムとしての国民国家と（支配―従属）システムは、新しい社会原理としての共産主義を実現するに到るための、階級闘争の場にならず、過渡期世界論は、こうした世界史的構造変動の場の連続性と変容とをトレースするのである。

ところで、ここで突然、階級指定や、階級形成の問題を持ち出したのは理由がある。

革命論は、変革対象世界とともに、それと相互規定的に、革命主体をも明らかにするものでなければならぬ。資本主義世界体制のトータル否定、超克を実現する変革主体と、主体形成、すなわちプロレタリアートの世界史的形

今日、多国籍企業資本の顕著な伸長と、世界制覇は、その一方で国民国家の現実的基礎としての国民経済の空洞化、形骸化を急速に促している。これは国民国家そのものの存続をも、およびやすものとならざるをえない。また（支配―従属）システムの深化・再構造化は、各エスニシティ集団の国際的流動化と、自立化、文化的複合

「階級文化」というものを考えなければ、階級闘争も考えられないだろう……資金をめぐる経済的階級闘争はいつでもあります……しかし二〇世紀が証明したように、資金が結構もたらえるようになると……階級協調路線までが出てきてしまふ……。しかし、階級文化があり文化的な階級分断線が存在する限り、階級闘争というものはいつまでも続いていく……またそういうことによつて政治的な意味での真の階級闘争が闘われてきた……（「現代思想」89年5月号）

この点については、柴田三千雄もまた、前掲書（P25）において、

示すところでは、ソヴェト・コンミューン原理、プロレタリア国際主義等である。これはまた、階級形成の政治的文化的指標でもある。そして、近代資本主義世界のフレイムとしての国民国家と（支配―従属）システムは、新しい社会原理としての共産主義を実現するに到るための、階級闘争の場にならず、過渡期世界論は、こうした世界史的構造変動の場の連続性と変容とをトレースするのである。

ところで、ここで突然、階級指定や、階級形成の問題を持ち出したのは理由がある。

革命論は、変革対象世界とともに、それと相互規定的に、革命主体をも明らかにするものでなければならぬ。資本主義世界体制のトータル否定、超克を実現する変革主体と、主体形成、すなわちプロレタリアートの世界史的形

今日、多国籍企業資本の顕著な伸長と、世界制覇は、その一方で国民国家の現実的基礎としての国民経済の空洞化、形骸化を急速に促している。これは国民国家そのものの存続をも、およびやすものとならざるをえない。また（支配―従属）システムの深化・再構造化は、各エスニシティ集団の国際的流動化と、自立化、文化的複合

「階級文化」というものを考えなければ、階級闘争も考えられないだろう……資金をめぐる経済的階級闘争はいつでもあります……しかし二〇世紀が証明したように、資金が結構もたらえるようになると……階級協調路線までが出てきてしまふ……。しかし、階級文化があり文化的な階級分断線が存在する限り、階級闘争というものはいつまでも続いていく……またそういうことによつて政治的な意味での真の階級闘争が闘われてきた……（「現代思想」89年5月号）

この点については、柴田三千雄もまた、前掲書（P25）において、

示すところでは、ソヴェト・コンミューン原理、プロレタリア国際主義等である。これはまた、階級形成の政治的文化的指標でもある。そして、近代資本主義世界のフレイムとしての国民国家と（支配―従属）システムは、新しい社会原理としての共産主義を実現するに到るための、階級闘争の場にならず、過渡期世界論は、こうした世界史的構造変動の場の連続性と変容とをトレースするのである。

ところで、ここで突然、階級指定や、階級形成の問題を持ち出したのは理由がある。

革命論は、変革対象世界とともに、それと相互規定的に、革命主体をも明らかにするものでなければならぬ。資本主義世界体制のトータル否定、超克を実現する変革主体と、主体形成、すなわちプロレタリアートの世界史的形

今日、多国籍企業資本の顕著な伸長と、世界制覇は、その一方で国民国家の現実的基礎としての国民経済の空洞化、形骸化を急速に促している。これは国民国家そのものの存続をも、およびやすものとならざるをえない。また（支配―従属）システムの深化・再構造化は、各エスニシティ集団の国際的流動化と、自立化、文化的複合

「階級文化」というものを考えなければ、階級闘争も考えられないだろう……資金をめぐる経済的階級闘争はいつでもあります……しかし二〇世紀が証明したように、資金が結構もたらえるようになると……階級協調路線までが出てきてしまふ……。しかし、階級文化があり文化的な階級分断線が存在する限り、階級闘争というものはいつまでも続いていく……またそういうことによつて政治的な意味での真の階級闘争が闘われてきた……（「現代思想」89年5月号）

この点については、柴田三千雄もまた、前掲書（P25）において、

示すところでは、ソヴェト・コンミューン原理、プロレタリア国際主義等である。これはまた、階級形成の政治的文化的指標でもある。そして、近代資本主義世界のフレイムとしての国民国家と（支配―従属）システムは、新しい社会原理としての共産主義を実現するに到るための、階級闘争の場にならず、過渡期世界論は、こうした世界史的構造変動の場の連続性と変容とをトレースするのである。

ところで、ここで突然、階級指定や、階級形成の問題を持ち出したのは理由がある。

革命論は、変革対象世界とともに、それと相互規定的に、革命主体をも明らかにするものでなければならぬ。資本主義世界体制のトータル否定、超克を実現する変革主体と、主体形成、すなわちプロレタリアートの世界史的形

今日、多国籍企業資本の顕著な伸長と、世界制覇は、その一方で国民国家の現実的基礎としての国民経済の空洞化、形骸化を急速に促している。これは国民国家そのものの存続をも、およびやすものとならざるをえない。また（支配―従属）システムの深化・再構造化は、各エスニシティ集団の国際的流動化と、自立化、文化的複合

「階級文化」というものを考えなければ、階級闘争も考えられないだろう……資金をめぐる経済的階級闘争はいつでもあります……しかし二〇世紀が証明したように、資金が結構もたらえるようになると……階級協調路線までが出てきてしまふ……。しかし、階級文化があり文化的な階級分断線が存在する限り、階級闘争というものはいつまでも続いていく……またそういうことによつて政治的な意味での真の階級闘争が闘われてきた……（「現代思想」89年5月号）

この点については、柴田三千雄もまた、前掲書（P25）において、

示すところでは、ソヴェト・コンミューン原理、プロレタリア国際主義等である。これはまた、階級形成の政治的文化的指標でもある。そして、近代資本主義世界のフレイムとしての国民国家と（支配―従属）システムは、新しい社会原理としての共産主義を実現するに到るための、階級闘争の場にならず、過渡期世界論は、こうした世界史的構造変動の場の連続性と変容とをトレースするのである。

ところで、ここで突然、階級指定や、階級形成の問題を持ち出したのは理由がある。

革命論は、変革対象世界とともに、それと相互規定的に、革命主体をも明らかにするものでなければならぬ。資本主義世界体制のトータル否定、超克を実現する変革主体と、主体形成、すなわちプロレタリアートの世界史的形

今日、多国籍企業資本の顕著な伸長と、世界制覇は、その一方で国民国家の現実的基礎としての国民経済の空洞化、形骸化を急速に促している。これは国民国家そのものの存続をも、およびやすものとならざるをえない。また（支配―従属）システムの深化・再構造化は、各エスニシティ集団の国際的流動化と、自立化、文化的複合

「階級文化」というものを考えなければ、階級闘争も考えられないだろう……資金をめぐる経済的階級闘争はいつでもあります……しかし二〇世紀が証明したように、資金が結構もたらえるようになると……階級協調路線までが出てきてしまふ……。しかし、階級文化があり文化的な階級分断線が存在する限り、階級闘争というものはいつまでも続いていく……またそういうことによつて政治的な意味での真の階級闘争が闘われてきた……（「現代思想」89年5月号）

この点については、柴田三千雄もまた、前掲書（P25）において、

示すところでは、ソヴェト・コンミューン原理、プロレタリア国際主義等である。これはまた、階級形成の政治的文化的指標でもある。そして、近代資本主義世界のフレイムとしての国民国家と（支配―従属）システムは、新しい社会原理としての共産主義を実現するに到るための、階級闘争の場にならず、過渡期世界論は、こうした世界史的構造変動の場の連続性と変容とをトレースするのである。

ところで、ここで突然、階級指定や、階級形成の問題を持ち出したのは理由がある。

革命論は、変革対象世界とともに、それと相互規定的に、革命主体をも明らかにするものでなければならぬ。資本主義世界体制のトータル否定、超克を実現する変革主体と、主体形成、すなわちプロレタリアートの世界史的形

今日、多国籍企業資本の顕著な伸長と、世界制覇は、その一方で国民国家の現実的基礎としての国民経済の空洞化、形骸化を急速に促している。これは国民国家そのものの存続をも、およびやすものとならざるをえない。また（支配―従属）システムの深化・再構造化は、各エスニシティ集団の国際的流動化と、自立化、文化的複合

「階級文化」というものを考えなければ、階級闘争も考えられないだろう……資金をめぐる経済的階級闘争はいつでもあります……しかし二〇世紀が証明したように、資金が結構もたらえるようになると……階級協調路線までが出てきてしまふ……。しかし、階級文化があり文化的な階級分断線が存在する限り、階級闘争というものはいつまでも続いていく……またそういうことによつて政治的な意味での真の階級闘争が闘われてきた……（「現代思想」89年5月号）

この点については、柴田三千雄もまた、前掲書（P25）において、

示すところでは、ソヴェト・コンミューン原理、プロレタリア国際主義等である。これはまた、階級形成の政治的文化的指標でもある。そして、近代資本主義世界のフレイムとしての国民国家と（支配―従属）システムは、新しい社会原理としての共産主義を実現するに到るための、階級闘争の場にならず、過渡期世界論は、こうした世界史的構造変動の場の連続性と変容とをトレースするのである。

現代世界の政治経済分析視座の獲得のために・第5回

一、世界認識と変革像のラフ・スケッチ

さて、本稿もそろそろまとめに入らなければならない。ここまで連載を、いわば前提をなす論点の整理と、我々の主体的位置規定として、例え粗雑なスケッチ程度にもせよ、我々なりの観点から現代世界認識のポジティブな像を提起する段である。またそれは、現代における革命運動についての我々としての像の確定を行うことと不可分の作業でもある。

マルクス主義の危機が論じられてすでに久しい。現代世界におけるトータルな政治・社会的変革思想としてのマルクス主義は、現実世界の革命運動、諸実践の混迷を直接に反映せざるをえない運命にある。とりわけ、民主化運動の激動の中の現存社会主義の現実はその責のすべてをマルクス主義に求めることの可否は別としても、その思想的危機の深甚性、切迫性を示して余りあるものがある。こうした事態を、あれこれの現状肯定を謳歌するブルジョア・イデオロギー、反共デマゴギーの類の百鬼夜行ぶりと同列に論じるわけにはいかなが、少なくとも現存社会主義国における諸事態をも含めての現実世界についての革命思想としての有効性、実践性が示されなければならない。我々がとりくまなければならないのは、まさにこうした性質の問題である。

現代世界を、世界史的尺度からどのように性格付けるか？

資本主義の生産様式はいしは、資本主義社会構成体として、唯物史観の世界史的段階区分にもとづき時代規定を行なうことは前提ではあるが、これだけでは充分ではない。問題は、この資本主義の生産様式が、世界史のレベルで見ても、どのような世界体制、ないしは世界システムを構成しているのか？というところにある。

とりあえず我々は、〈市民社会—政治国家〉の成立を内容とする「国民国家」を政治的ユニットとし、〈支配—従属〉（ないしは〈中枢—周縁〉）構造を「世界システム」とした、世界史的な社会構成体という時代規定を付け加えることとする。こうした世界史的な、また世界史的な時代区分を考えておかなければ、我々のめざす社会主義革命の、政治、社会的変革の意義、性格が明瞭にならないように思われる。また、資本主義の主要な形態の変動にもとづく資本主義の段階規定（いわゆる「段階論」）は、こうした時代区分の下位概念としておかなければならない。

世界史的な社会構成体の総体的変革をめざす革命の意義と性格とは？

従ってプロレタリアートの共産主義革命は、こうした世界史的段階としての資本主義社会の根本的変革をめざすものであるがゆえに、言葉の真の意味での「世界同時革命」でなければならない。それは、プロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争の単純な世界大展開という意味でもなければ、また各民族国家内における一国的階級闘争の算術的総和という意味でもない。国民国家の政治的ユニット群と、支配—従属の世界システムとで不可分に結合・構成された現存世界秩序のトータルな転覆という意味内容において「同時（simultaneous）」なのである。またこれと相即的に他方では国際階級闘争の同時性、等質性を自らのう

二、資本主義社会の世界史的段階規定について

資本制近代の資本構造

共産主義へと到る、世界史的な社会構成体移行の過程そのものであり、構造変遷の観点から捉えた長期に亘る歴史の時期区分である。資本主義的世界体制とブルジョアジーの興隆を展望するこの構造変遷のプロセスそのものを特定する時期区分と時代規定が必要なのは、この一時代を貫く、プロレタリアートの階級闘争および階級形成の政治的指標を明確にするためである。また逆にこうした主体の

ちに体现する革命運動—共産主義の実現に向けた変革主体としてのプロレタリアートの意識的、能動的実践という主体的要素の存在が指定されなければならない。

では、なぜ「過渡期世界」という独特のタームが必要なのか？

過渡期世界とは、資本主義から

の提起しかりである。現存社会主義については、後述することとし

国民国家的統合と支配—従属システムを粉碎する過渡期世界の階級闘争

国民国家的統合と支配—従属システムを粉碎する過渡期世界の階級闘争

「唯物史観にもとづいた総体的な人類史の段階区分は定見を確立するにはまだ至っていない」（現代思想を語る事典）といわれている。確かに、学的水準からいえば、この問題は、資本主義の生産様式が完全に歴史的過去のものとならない限り、完全な規定を確立することとは難しいであろう。だが我々は、これを歴史の推移に委ねてしまふわけにはいかない。しかも今日にあっては、段階区分そのものは学究的研究の対象として、仮に留保したとしても、その性格規定には、マルクス主義が直面する切実な実践的疑問が納められているのである。現存社会主義しかり、プロレタリアートの国民国家の下への体制的統合しかり、そして従属理論

であり、またそのためには、政治的自立が必要であった。この政治的自立、すなわち政治的凝集力の創出は、「中心」の場合と同様に、民衆労働者の世界の内部矛盾を契機とする介入と、強力な国民的アイデンティティのイデオロギーを以て行われる。帝国主義段階における「民族革命」がそれであるが、しかしそれは、一九世紀ヨーロッパの後進資本主義国に比べる遙かに大きな困難を内包している。というのは、この場合には、先行する従属期の中央勢力による全体的関連づけと、それから生ずる固有の重層関係が、逆説的にせよ、新しい政治的凝集を可能とする契機となる民衆労働者の世界の旧い形態と、帝国主義段階が要請する産業革命（これは一般に「工業化」とよばれているが、これら地域にとっては「産業革命」である）が惹起する民衆労働者の世界のドラスティックな解体・変質のギャップが大きく、そのうえ、「中心」からの国際的妨害が強いからである。このため、このギャップを埋め、また外的圧力を排除するために、国家の政治的凝集もまたドラスティックな形態をとらざるをえず、いちじるしく権威主義的な政治体制に帰着することとなる。

「唯物的にもとづいた総体的な人類史の段階区分は定見を確立するにはまだ至っていない」（現代思想を語る事典）といわれている。確かに、学的水準からいえば、この問題は、資本主義の生産様式が完全に歴史的過去のものとならない限り、完全な規定を確立することとは難しいであろう。だが我々は、これを歴史の推移に委ねてしまふわけにはいかない。しかも今日にあっては、段階区分そのものは学究的研究の対象として、仮に留保したとしても、その性格規定には、マルクス主義が直面する切実な実践的疑問が納められているのである。現存社会主義しかり、プロレタリアートの国民国家の下への体制的統合しかり、そして従属理論

さらに続けて二〇世紀の「社会主義革命とは何であるのか」という自らの設問に対する回答を、余り明示的ではないが、「国民国家」に對抗する、ロシア革命の革命原理としての「労働者階級の国家」というところを求めているように読みとれることもあわせて紹介しておこう。（引用はいずれも「近代世界と民衆運動」）

「唯物的にもとづいた総体的な人類史の段階区分は定見を確立するにはまだ至っていない」（現代思想を語る事典）といわれている。確かに、学的水準からいえば、この問題は、資本主義の生産様式が完全に歴史的過去のものとならない限り、完全な規定を確立することとは難しいであろう。だが我々は、これを歴史の推移に委ねてしまふわけにはいかない。しかも今日にあっては、段階区分そのものは学究的研究の対象として、仮に留保したとしても、その性格規定には、マルクス主義が直面する切実な実践的疑問が納められているのである。現存社会主義しかり、プロレタリアートの国民国家の下への体制的統合しかり、そして従属理論

この資本主義の時代は、各段階に小区分することが可能である。コンラート・エフの長波理論もここで生かされる。約五〇年周期でくり返される景気活動に伴って、資本蓄積（主要な形態の交替が観察される。今日までの歴史では、重商主義（商人資本）—自由主義（産業資本）—帝国主義（金融資本）—覇権帝国主義（国家独占資本）の各段階が継起しており、現下七十年前後以降をメルクマールとして、多国籍企業資本を主要形態とする新たな移行期にある。これがどのような段階となるかについては、階級闘争、とりわけ、現存社会主義諸国における大変動と、これと連動する戦後ヤルタ体制の根本的再編という政治的激動の帰すういにかんにかかっている。

「唯物的にもとづいた総体的な人類史の段階区分は定見を確立するにはまだ至っていない」（現代思想を語る事典）といわれている。確かに、学的水準からいえば、この問題は、資本主義の生産様式が完全に歴史的過去のものとならない限り、完全な規定を確立することとは難しいであろう。だが我々は、これを歴史の推移に委ねてしまふわけにはいかない。しかも今日にあっては、段階区分そのものは学究的研究の対象として、仮に留保したとしても、その性格規定には、マルクス主義が直面する切実な実践的疑問が納められているのである。現存社会主義しかり、プロレタリアートの国民国家の下への体制的統合しかり、そして従属理論

また、資本主義の各段階の移行とともに、国民国家における政治的凝集の性格の変化が生じる。絶対主義（主権国家）—自由主義（名望家国家）—帝国主義（国民国家）—介入主義の各々の国家形態が、各段階に対応する。現下においては権威主義的国家—国家—コーポラティズムによる新たな国家形態の形成に向けた改革が行われている。こうした国家形態、とりわけ帝国主義段階以降の国民国家への政治統合の性格の変化は、その時々のプロレタリアートの戦闘に影響を与えない。

「唯物的にもとづいた総体的な人類史の段階区分は定見を確立するにはまだ至っていない」（現代思想を語る事典）といわれている。確かに、学的水準からいえば、この問題は、資本主義の生産様式が完全に歴史的過去のものとならない限り、完全な規定を確立することとは難しいであろう。だが我々は、これを歴史の推移に委ねてしまふわけにはいかない。しかも今日にあっては、段階区分そのものは学究的研究の対象として、仮に留保したとしても、その性格規定には、マルクス主義が直面する切実な実践的疑問が納められているのである。現存社会主義しかり、プロレタリアートの国民国家の下への体制的統合しかり、そして従属理論

他方、現存社会主義諸国は、ごく短期間の断絶を除いて、国民国家—世界システムという、資本主義世界体制の枠組みの中に基本的には抱擁されてきたと考えられる。しかし、その国民の国民経済の性格、国家形態等については、いま少し検討したうえで、機会を改めて提起させていただきたい。

資本主義の段階規定

（三回へ続く）